

イネカメムシの発生動態と被害の品種間差

[要約]

イネカメムシ成虫は出穂直後の水田へ飛来する。早生から晩生までの品種が混在する条件において、成幼虫の水田内における密度と、吸汁加害による不稔及び斑点米の被害は、早生品種や晩生品種で多くなる傾向がある。

茨城県農業総合センター農業研究所

令和7年度

成果
区分

技術情報

1. 背景・ねらい

イネカメムシは7月から9月にかけて発生し、早生品種から晩生品種まで不稔による減収被害や斑点米による品質低下を引き起こすことから、効果的な防除対策が求められている。水稻の熟期の違いが発生動態及び被害に及ぼす影響に関する知見は少ないことから、県内の主要品種におけるイネカメムシの発生動態及び被害の実態を明らかにする。

2. 成果の内容・特徴

- 1) 早生品種「一番星」（出穂期7月12日）では、出穂期以降に成虫が確認され、その後幼虫が発生する（図1上段）。
- 2) 中生品種「コシヒカリ」（出穂期7月30日）では、出穂期以降の8月上中旬に成幼虫が確認されるが、栽培期間中を通じた成幼虫の密度は早生品種や晩生品種と比較すると低い傾向にある（図1中段）。
- 3) 晩生品種「あさひの夢」（出穂期8月17日）では、出穂期以降に成虫が確認され、その後幼虫が発生する（図1下段）。
- 4) 収穫時の口針鞘の付着率及び不稔率は、早生品種で最も高く、中生品種で最も低い。斑点米混入率は、幼虫の発生量が最も多かった晩生品種で、早生品種や中生品種と比較して有意に高い（表1）。
- 5) 以上のことからイネカメムシの密度が集中しやすい早生品種や晩生品種では、特に防除を徹底する必要がある。

3. 成果の活用面・留意点

- 1) 本成果は令和7年に水戸市上国井町において同一圃場内で各品種を栽培し、栽培期間中の病虫害防除や追肥等は実施しない条件下で実施した試験である。
- 2) 中生品種が地域内の大半を占める地域では、中生品種の中でも周囲より出穂の早いものから加害が始まることが予想されるため、留意する。
- 3) 夏季の気温によってイネカメムシの発生動態は異なるため、各年の発生状況は茨城県病虫害防除所の情報も参考にする。

4. 具体的データ

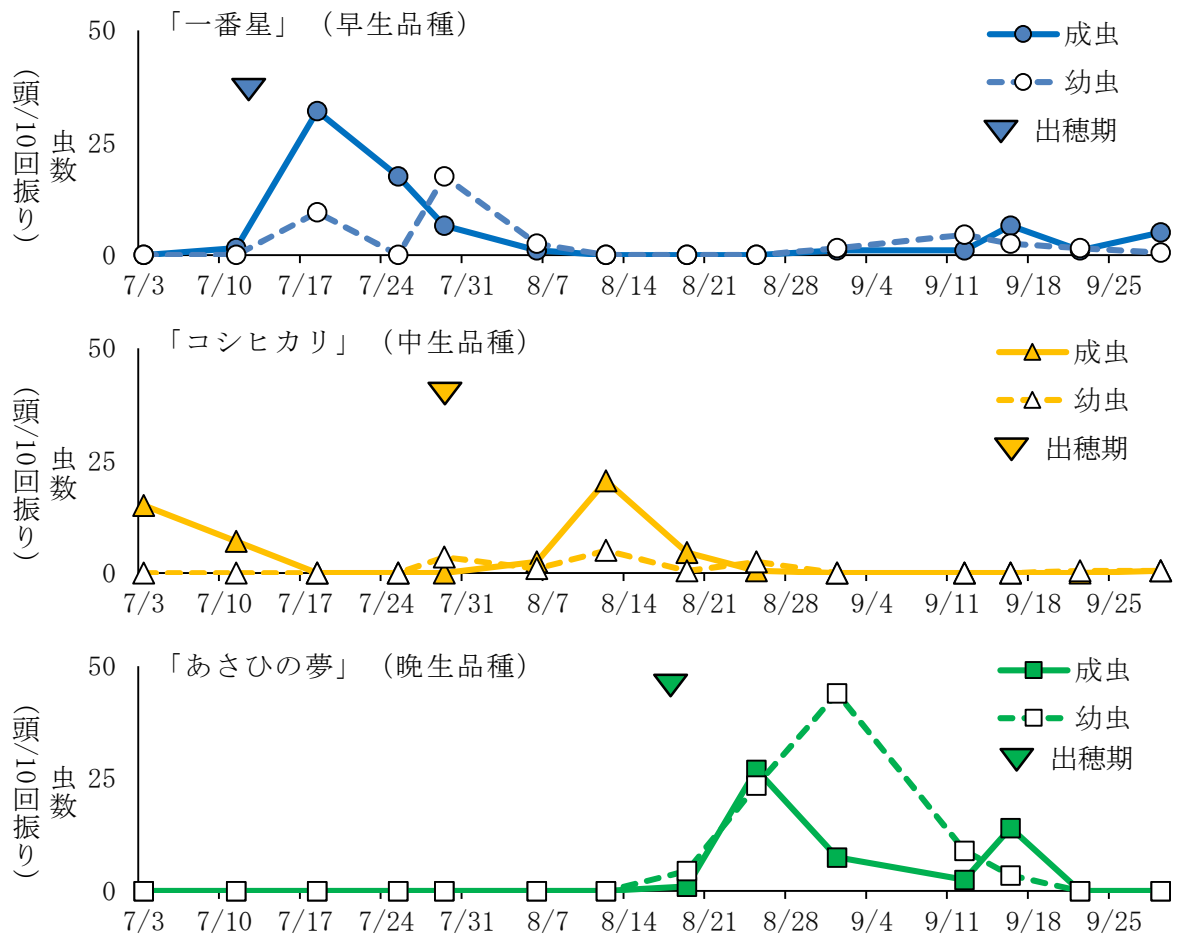


図1 各品種におけるイネカメムシ成幼虫の発生動態

※移植日：令和7年5月8日、出穂期：「一番星」7月12日、「コシヒカリ」7月30日、「あさひの夢」8月17日。調査期間中に薬剤による害虫防除は実施していない。各区 720 m² × 2 反復。虫数はすくい取り 10 回振りの平均値を示す。

表1 イネカメムシによる被害の品種間差

品種 ¹⁾	熟期	口針鞘の付着利率 ²⁾ (%)	不稔利率 ²⁾ (%)	斑点米混入率 ³⁾ (%)
一番星	早生	41.1 a	50.9 a	0.38 b
コシヒカリ	中生	3.6 c	14.1 c	0.42 b
あさひの夢	晩生	13.1 b	29.9 b	4.37 a

1) 各区の移植日及び出穂期は図1の注釈を参照。

2) 各区の各株の中で最も長い穂 15 本を無作為に切り取り、各穂について全粒数、口針鞘の付着粒数、不稔粒数を計数した。不稔粒はすべて計数したため、吸汁被害による不稔以外も含まれる。

口針鞘の付着利率 = 口針鞘の付着粒数 / 全粒数、不稔利率 = 不稔粒数 / 全粒数 × 100 で算出した。

3) 各区坪刈りした玄米をグレーダー (1.85 mm) で調整した後、全粒中の斑点米数を計数した。各区 5 反復ずつ実施した。斑点米混入率 = 斑点米数 / 全粒数 × 100 で算出した。

※ 異なる英小文字は有意差を示す (Steel-Dwass 法、p < 0.01)。

5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

需要に応じた米粉用米・飼料用米品種の極多収栽培技術の確立・令和6年度～令和8年度・病虫研究室、水田利用研究室、作物研究室